

「色を時間で見る」自然なギャラリー 「100のくも」絵本原画の展示・カタシモワイナリー

天窓から光が差し、風が流れ、建物全体から醸し出す雰囲気。
自然光だと、朝、昼、夜と色が違って見え、魅力的で、10時から14時まで
は天窓から入ってくる自然光のおかげで、本物の色が見える。
美術館では作れない自然光の開放的な空間での展示は、「100のくも」
のテーマにピッタリ。
「今までにこのようなロケーションに出会うチャンスがなかった。木立の
ような絵の流れ、八脚のイーゼルには、ワイン樽や醸造道具が
背景に見え、ワイナリーの歴史、あせ、匂いなどの空気感に作品が、包ま
れている。まるで砂漠の中で金を探すような空間の中で作品を展示する
ことができ、非常に光栄だ。」



堤防からの空のくも:発想はここから
毎朝、大和川の土手をウォーキングし、雲を観察、雲のスケッチだけで8
か月かかった。おかげでストーリーをあえて考えず、たくさんのスケッチ
から1枚を取り出し、1枚の右、逆に左、あるいは上を発想したり、下を考
え、自由に展開。ゆえに制作中、自分自身の気持ちを開放することができ
、今までにない自由な作品となった。
絵本の世界:数と種類で一つのメッセージを伝えなければならない。
絵本のストーリーとして大切にしているのは、こども憲章から2項目、1
つは「学校だけが学ぶところではない」、2つ目は「世界で君はただ一人
だから大切」というメッセージを考えるように心がけている。
ユニセフを通じて知ったことですが、世界では
戦争で親を亡くした子どもたち、その中には名
前ではなく番号で呼ばれる子もいる。一番欲
しがるのが絵本だそうです。それは絵本の読
み聞かせの時だけ抱きしめてもらえる親の愛
を感じるからだという。絵本を創る上での指
針とさせてもらっている。

木虎徹雄 KITORA TETSUO (絵本作家・柏原在住)

ユニークなキトラブルーを出発点に、イタリアポローニャ国際絵本
原画展において日本人最多の8回入選など国際的に活躍



3.11の大震災以降、私の絵は変わった！ 見る人に「大きな感動」を呼び起こすよう絵

絵を描き始めて10年目。
「私の絵画は 2011 年の東北の大地震をへて大きく変化しました。
当時、私は被災者ではありませんが、あの地震・津波と原発事故によ
って日本の空気が一変し、その後の日本人の気持ちが大きく変わったこと
を感じました。
そのことは私にとって『絵という表現はどうあるべきか』を問い直す大
きなきっかけとなり、震災以降、私は絵画で人に『希望』を起こさせるよ
うなものを描こうと決心しました。
そのためには、見る人に『大きな感動』を呼び起こすように、絵の内容と
構図などに今までにない斬新さの工夫と、また感動のインパクトを伝
わるサイズのかかなりの大きさ120号以上の大作を作り続けることにな
りました。」



空は希望の象徴
絵画を描き始めた時は「空」をテーマに描いていました。空は流れる時
間と同様に全く同じ雲の様相はありません。その空と人間生活を掛け
合わせて、人生の諸行無常を表現していました。ですが、空が晴れる時
はやはり人々に希望をもたらしてくれます。災害が多くなったこの時代、
空を希望の象徴として描いていきたいと思いました。

絵画は未来の子供たちへのメッセージ
絵画は、同時代に生きる人々に対して向けられる表現、そこには同じ時
代を生きるリアリティが必要だと感じています。同時に絵画は未来の人々への現在か
らのメッセージにもなり得ます。だからこそ構想の段階で考えたいのは「どのよう
に明日へ向けた希望を見いだすことができるのか。」ということです。

浜本隆司 HAMAMOTO TAKASHI
(アーティスト・尼崎在住)

1982年大阪芸術大学卒業後、大阪、名古屋、東京、
京都などで個展を開催、兵庫、大阪をはじめ多くの
グループ展に出展など全国的に展開



KASHIWARA 芸術祭 2019 のオープニングイベントで開催した4名の特別出展作家による
「アーティスト・トーク」(会場: 柏原市立市民プラザ)

Artist Talk Report

2019.09.21 / 11.02

レポートは、特別出展作家が、自らこれまでの制作活動と出展作品について
語ったものを事務局でとりまとめたものです。

絵を描くときは周りから始める！ 現場のデッサンと周辺観察がベース

現場に行ってデッサンをする。
「現場の周りには重要な要素が含まれている。現場の写生から、自身で
判断、感じたことから絵画表現に至るまでのプロセスは、難しく大変な
作業です。しかし、時折自身のイメージと表現が一致する時に、とても楽
しく幸せを感じる。またひとつの現場から伝わる衝撃や感動を忘れる
ことなく描き切りたい。その熱意を生涯かけて追い求め続けたいと思っ
ています。」
・動物園の動物の動きや表情からおもしろい着想が生まれる。
・山に行くと朝と夜とでは見せる顔が全く違う。



人の内面を描きたい
大学進学で山形県に。そこで東日本大震災に被災。
社会の中で人が何をどう感じるかは、つきつめて考えたことがなかつた。
被災してつらそうにしている人を見て、何が出来るかを考えた。
人や動物の表情から内面を伝えることができればいいなと思った。
助け合いがなければ私も人間は成立しえない。大阪はおもしろいことが
たくさんあり、活性化されるし、選択肢もたくさんあり、幸せを感じる。
芸術活動の原点は、「人に元気になってもらってなんぼ」という思いがあ
る。ポジティブに、これからもがんばっていきたい。
日本画なのに日本画でない、その秘密は
日本画の画材を大切にしている。
にかわの濃度で色合いや発色が変わってくるので気を付けている。
岩絵の具では、番号が違うと混ざらないので、上から塗ることで表現に
抑揚を持たせている。



森山陽介 MORIYAMA YOUSUKE
(日本画家・柏原在住)
2013年東北芸術工科大学卒業、在学中から個展等
開催、2016年の日展入選、2017年月刊美術7月号
にて作品特集を掲載など活発に精力的な活動展開



「時の邂逅(かいこう)」 大坂夏の陣一道明寺合戦・小松山の闘い

2018年9月、勤務先の中学校の運動場。
「体育祭の全体練習の最中、周りに見えるものや音は普通なのに、急に
アナログテレビのアンテナ信号が受信できない時のような、いわゆる砂
嵐を被り、その中に、一瞬ではあったが多くの人馬や軍勢が走り回
るのを感じた。ほんの数秒であったのだが、なんだろうと思っていると、再び
同じ状況が…、再度多くの人馬や軍勢が走り回る…、これは小松山。
気になったので職員室に戻ってスマートフォンで小松山を検索すると、
一番目に飛び込んできたのが、赤字で書かれた『一意』という文字…、
400年前に小松山で闘った後藤又兵衛の息子の中に、『一意』という法
名を持った人物がおり、大坂夏の陣に従軍していた、ということが述
べられていた。
今まで生きてきた中で、同じ名前の人には出会った経験は無かつたのだ
が、初めて400年もの前に生きた人物に。法名とは言え同じ名前を持つ
人物に出会うとは、これは、小松山の闘いを
描けという事なのだろうか。
この事がきっかけで、私が動いている柏原
市立玉手中学校のグラウンドの北側で起き
た大坂夏の陣の一つ道明寺合戦を屏風に
描く事になった。」

清水一意 SHIMIZU HITOI
(日本画家・前美術教員柏原在住)
人間を描くことは「新たな命」「永遠の命」を描くこと、
これをモットーに制作活動に励む。今回の「大坂夏の
陣」の屏風は、これまでの活動の集大成



なぜ、美術の教員に？
もの心ついた頃からずっと絵が好き。家具や家財にらくがきは禁止、そ
の代わり家の壁ならいくら描いても良かった。壁に絵が何重にも重なり
びっしりと埋め尽くされるまでずっと壁に絵を描いていた。母が3回
壁を塗り変えた。こんなアートな環境で育った。
3年間の浪人生活を経験し入学した京都市立芸術大学では、第1志望
は彫刻科であったが、4年間じっくりものを見つめようと日本画科を専
攻した。卒業後は、研究を重ね、自分の経験を高め、経済的な基盤を固
めて長期的展望を持つことも一つの方向であると考え教員になった。
なぜ、フィギュアをつくるのか？
教員になり授業準備や授業研究に前向きに取り組んだが、何か物足り
なく感じた。本物を見てその感動を伝えようとヨーロッパに研修、イタ
リアで見たミケランジェロの作品は、「これは人間が作ったものなの
か」と強い衝撃を受けた。彫刻作家を目指していたこともあり、3D感
覚で対象を認識し作品を描くのもその影響である。今回は立体的な画
面構成を考える上でその準備としてフィギュア(模型)を作成した。

